吉備国際大学研究紀要
（社会福祉学部）
第21号，81－91，2011

英語教育の低年齢化に関する一考察

秀　真一郎

One Consideration about English Education in Early Childhood

Shinichiro HIDE

Abstract

This paper is aim to consider about English education in early childhood. Japanese education field is paying attention to English education now. Ministry of Education, Culture, Sports, Science & Technology officially announced a policy of the requirement about English education in Elementary school. This policy influenced not only to elementary school education but also to early childhood education. It is getting popular to have English activities in day-care centers and kindergartens, but the purpose of this content has various values in each early childhood education field. Required various functions to early childhood education fields make difficult the original purpose of early childhood education. English education in this field is also one of the difficulties about what children need. It is the time to think about what English education can do to Japanese early childhood education. Therefore, this paper asks people what the original meaning of English education in early childhood education.

Key words：English education, Globalization, Internationally-minded person, Culture
キーワード：英語教育，国際化，国際人，文化

Ⅰ．はじめに

現在，幼児教育現場を取り巻く状況は転換期を迎えようとしている。幼保一元化が叫ばれて久しい状態の中，認定子ども園という新たな情事教育環境が現れ，幼稚園と保育所の枠組みに対する考え方に変化が生じてきている。さらに，長きにわたる不況と女性の社会進出の波を受け，保育所に子どもを預けるために順番を待たなければならないという状態になっている。保育所の需要が伸びる中，日本の幼児教育の歴史の中核を担ってきた幼稚園の担う役割も変化してきている。延長保育という形を取り，通常時間の終了後に子ども達を預かることを行ってきている。

この延長保育（預かり保育）はまさに幼児教育現場における，新たに始まった特筆活動といえるであ

吉備国際大学社会福祉学部社会福祉学科
〒716-8508　岡山県高梁市伊賀町８
Department of Social Welfare, School of Social Welfare, KIBI International University
8, Igamachi Takahashi, Okayama, Japan（716-8508）

ろう。特筆活動においては，延長保育に止まらず様々な分野において行われ，幼稚園だけでなく保育所においても始まっている。

子どもの体力低下に対する取り組みとして体操教室やサッカー教室を保育内容に取り入れ，その他にも書道教室，絵画教室，鼓笛隊や和太鼓といった芸術分野にまで広がっている。そんな中，英語教室もまた幼児教育において特筆すべき活動として注目され，その活動は全国に広がってきている。

利用・入園希望者獲得における取り組み

待機児童数の増加を抑え，減少させようとする一方で，少子化の問題から来る子どもの数の減少は保育所存続を危惧する要因となっている。さらに，これまでの入園保育所の一ヵ所指定から，保護者による一定地域内の選択制となり，保育所選びの自由化も保育所における問題となっている。上記した幼稚園が存続ことと同様，幼児教育現場では利用・入園希望者獲得は死活問題となっている。そのためにも特筆すべき活動というものが，ある意味保護者に対するアピールポイントとなっているかのようである。

その中において，英語教育に対する注目は単なる特筆活動とは一線を引いているようである。その背景には，文部科学省による小学校英語教育必修化があるのではないだろうか。この取り組みを打ち出すことによって，幼児教育現場における英語教育の要望は増加の傾向にある。そして，その要望を受け保育内容における英語教育の取り入れを行っている幼児教育現場は増加している。外国人講師を派遣する英会話教室経営のシェーンコーポレーションジャパン取締役の小野田浩己さんは「子供の数が減るなか，英語を教える園に幼児が集まる傾向があります」（幼稚園で英語「必修」のナゾ）と答えた。

英語教育を取り巻く現況

英語教育は実際に幼児教育現場で進められているが，伝えられている子ども達の反応はポジティブなものばかりである。盛岡市にて実際に英語教育を行っている幼稚園では，ネイティブの英語教師を招き入れ，歌やダンス，カードゲーム等をしている。子ども達は「楽しい」や「もっとやりたい」という言葉を口にし，「大きくなったら英語を使っていろいろしたい」という内容まで飛び出していると報じられている。

このように幼児教育現場での英語教育は，子どもたちにも受け入れられているようだが，保護者の反応はさらに大きなもののようである。自らの英語教育の経験から，中・高による英語教育ではコミュニケーションを取るまでに至らなかったことも影響しているようである。そして，自身の子どもに対して，自ら経験した英語に対するコンプレックスを感じることなく，英語を使いこなすようになってほしいという期待が込められているようである。

英語教育の低年齢化

今，日本の幼児教育におかれている現状，保護者の要望，子どもの反応からもわかるように，英語教育に対する期待は高まっている。追い打ちをかけるように小学校における英語教育の必修化が，英語教育の低年齢化を助長していると言っても過言ではない。まだ始まったばかりの取り組みであるが，幼児教育における英語教育の取り組みはどうあるべきか，また，何を目標とすべきかということを今一度考えなければならない。向かうべき方向性を定めなければ，当事者である子ども達にとって最も必要である“最善の利益”と考えられない。

Ⅱ．文部科学省による取り組み

文部科学省による英語教育の動向ー小学校における英語教育の必修化

ここでは，まず小学校における英語教育の必修化がどのように進められ，どのような方向へ向かっていこうとしているかという点について考えてみる。

文部科学省によって「18．英語教育改革総合プラン（新規）【達成目標２－１－５】」が打ち立てられた。その事業目的とし，「経済・社会のグローバル化が進展する中，子ども達が21世紀を生き抜くためには，国際的共通語となっている『英語』のコミュニケーション能力を身につけることが必要・・・(中略)，教育振興基本計画において『小学校段階における外国語活動を含めた外国語教育の充実』を目指す学習指導要領の着実な実施」としている。本計画において建てられた指標は「児童・生徒の英語学習に対する興味・関心及び理解・習熟度」とし，目標として「児童・生徒の英語学習に対する興味・関心について80%以上の肯定的な回答を目指す。また，理解・習熟度について60%以上を目指す」を掲げた。

小学校における英語教育は，文部科学省として取り組むことは初めてであり，事業において様々な観点から必要性が挙げられている。まず，事業の必要性だが，「小学校の外国語活動に関して，共通教材の配布，教員研修の計画的実施，ALT等の外部人材の積極的な活用などの条件整備」を挙げている。行政・国の関与の必要性として，「全国で一定の水準の外国語活動」，「地方公共団体が個々に取り組むだけでなく，共通教材の作成・配布，教員研修の体制作り等を国が行う」としている。

将来的ビジョンとして今後五年間の取り組むべき施策では，基本的方向として「個性を尊重しつつ能力をのばし，個人として，社会の一員として生きる基盤を育てる。①知識・技能や思考力・判断力・表現力，学習意欲等の『確かな学力』を確立する」とした。

中でも，平成20年６月27日に閣議決定された「経済財政改革の方針2008」第２章においては「国際的な人材強化」を打ち立て，英語教育の強化を謳っているその施策として①TOEIC・TOEFL・英検等の活用による到達目標の明確化，②JETプログラムを活用したALTや英語能力の高い人材確保，英語教員の採用の見直し，を挙げている。このような取り組みを通し，「若いうちから国際感覚を身につける教育」を目指している。

これらのことからも，文部科学省の掲げた「小学校における英語教育の必修化」は，英語という言葉に早い段階から触れることで，地球規模で進んでいる“グローバル化”に追従しようすることが読み取れる。言い換えれば，“若いうちから国際感覚を身につける”には，国際的共通語となっている英語に早い段階から触れることが大切だということになる。

小学校における英語教育必修化の現実

１）実施例

小学校における英語教育の現状について考えてみる。小学校において英語教育が導入されている中で，いかに子ども達が英語と関わっているかはカリキュラムを見ることで読み取れると考える。ここでは実際に行われている授業案の例を見ることとする。

「病院に行ったらどうするの？」

題材名：「お大事に…」

（“Take Care of Yourself”）

目　標：実際の生活場面で必要な，体調不良または身体的苦痛の表現の仕方を知る。“I have a headache.”（頭が痛い），“I have a stomachache.”（お腹が痛い），“I have a cut.”（切ってしまった）など。これらの表現を実際に使い，ALTや級友と対話する中で適切な処置をして

もらうという課題を達成する。

以上のような内容を中学校の英語教員，小学校の学級担任，補助教員，そしてALTの４人によって実際に行われている。小学校における英語教育においてもある考え方として，“英語に親しみ楽しく遊びながら，外国人との交流を体験させたい”という内容である。

２）子ども達の反応

「英語の勉強はいつから始めたらよいか」という設問に対して，小学校において英語教育を経験していない子どもは，「小学校高学年から中学校でよい」との回答が大半であった。しかし，経験のある子どもは，「小学校低学年あるいは入学前から始めるべき」という回答が半数近くに上っていた。この回答からもわかるように，今現在行われている小学校における英語教育が，子ども達の中でポジティブな印象を与えていると言える。小学校での英語教育を経験することにより，その経験をもっと積んでいきたい，早くからやった方がいいという意見は，子どもからの自発的・積極的活動の表れであると考える。

しかし，このような小学校での英語教育に対する取り組みは，文部科学省の考える“英語によるコミュニケーション能力”の形成に繋がっていくのであろうか。子ども達に対しては好印象を与え，積極的行動を期待できる様子がうかがえる。しかし，この取り組みとコミュニケーション能力がはたしてイコールで繋がるとは言い切れない。

これらの小学校での英語教育の様子は，内容やそこで取り組みに携わっている人々とはうらはらに，その本質を伝えることができずにいる。小学校において英語教育が始まったという表面的様子のみ伝わっていることこそ，幼児教育における英語教育の過熱化を生みだしているのではないだろうか。

Ⅲ．幼児教育現場における英語教育の現状

小学校における英語必修化の影響ー保護者における不安を形にした取り組み

幼児教育において英語教育に取り組む背景には，小学校の英語教育に備えるという意味が含まれていると言える。千葉県流山市「江戸川台ひまわり幼稚園」の園長は，「小学校でも英語のコミュニケーションがあるので」と英語教育の導入の理由を答えている。就学前の子どもを受け入れている英語教室では，「小さいうちからスタートする人が増え，０歳児からのクラスも新設されました。英語を習うことが『かっこいい』という時代もありましたが，今は『やらなきゃ』という意識が見られます」（今どきの幼児教育②）と答えており，親の意識・不安の表れという捉え方もされている。

実際に英語教育を取り入れている保育所・幼稚園の入園者数は子どもの数が減る中，増えているという結果にも表れているように，英語教育に対する取り組みは幼児教育現場では，もはや園の持つ“特色”と捉え，入園児を集める上で必修条件となっている。

本格的英会話の導入としてネイティブスピーカーを招き入れ，英語遊びを主流にした取り組みを行っている。歌やダンス，カードゲーム等を通して園児が英語に興味を持つような内容が主である。「It's sunny?」（今日は晴れですか？）「No!」「It's cloudy?」（今日は曇りですか？）「Yes!」，というようなやり取りなどの日常的状況を英語でやり取りする。絵の描かれたカードを見せ，その絵に該当する英単語を発音を真似て受け答えする。さらには，イマージョン教育という，大半を英語による生活をおくる教育を導入する幼児教育現場も出てきている。

このように，一言で幼児現場における英語教育の導入といっても，様々な形態があることがわかる。現在幼児教育現場で行われている英語教育に対して，子ども達の受ける影響とはどういったことが考

えられるのであろうか。

幼児期における英語早教育のメリット・デメリット

１）異文化に対する経験－英語という他言語の経験

英語に対して違う視点からとらえると，これまでの言葉というツールではなく，世界中に数多くある文化の一部としてとらえることができるであろう。英語を母国語とする国では，英語という言語によりその文化が発展したと考えられる。その文化は英語という言語なくしてはその発展は考えられず，英語に対するとらえ方も文化の一部として考えるべきであろう。文化の一部であるからこそ，英語に触れることによって英語を使う国・生活習慣・さらに文学においては，それぞれの言語の持つ世界観までが反映する。英語という言語を言語としてとらえるのではなく，文化の一部としてとらえることこそ，様々な経験を必要とする時期にある幼児の子ども達には必要なことである。

２）視野の広がり・違いを知る・違いを認める

英語教育と聞くとこれまでに経験したことのない，未知の世界という捉え方をしてしまうかもしれない。英語に対して特別視する傾向は，幼児期の子ども達を囲む大人達にはなおさら強いのではないだろうか。2009年６月29日朝日新聞（東京）朝刊に次のような意見があった。「私が英語が苦手なので，娘には早いうちから習わせたくて」（幼児の英語教育）という思いを語っていたのは，４歳の子どもを持つ母親の言葉であった。

日本人が日本という国において生活する中で，英語という言語は全く未知のものなのだろうか。幼児教育現場において，３歳以降の男の子が必ずと言っていいほど行う遊びがある。それは戦隊もののごっこ遊びである。このごっこ遊びを行っている子どもたちが扮しているヒーロー達に注目すると，そのほとんどが色によって分かれている。“○○レッド”“○○ブルー”のように，色によって分けられたヒーローに扮することを楽しんでいる子ども達やそれを見守っている大人でさえ，ある事実に気付いていない。それは子ども達はすでに生活の中で英語に慣れ親しんでいるという事実である。ヒーローに使われている色を“レッド”“ブルー”というように色の名前を英語によって認識していることに注目すべきである。

このように日本での生活において英語が浸透してきていることは，英語という言語に対して正しい認識を生みだす。特別視することで見えなかった，英語を文化の一部として捉えることを容易にする。英語を通して見る日本とは異なる文化は，違いという認識を子ども達に投げかける。しかし，生活に溶け込んでいる英語から文化を見ることで，違いに対する認識を違いに対する認めへと繋がっていくであろう。

３）経験の多様化

上記したように，幼児期の子ども達にとって経験とは，成長発達する上で欠かせない要素となっている。現在の幼児教育現場において，様々な活動が子ども達の日々の生活に取り込まれており，これらの様々な活動こそ基本的生活習慣を形成し，自身の興味関心を生み出すこととなる。このような経験の積み重ねは，子ども達に将来の夢を持つきっかけとなるだろう。

このように幼児期の子ども達における経験の多様化を，英語教育に対しても当てはめることができるのではないだろうか。英語教育を多様化する経験の一部として捉えるならば，今の子ども達にとっては活動内容として提供することに疑問を持つ必要はない。「玉川大の佐藤久美子教授（心理言語学）によると幼児期は日本語，英語の区別なく音が抵抗なく入ってきて上手にまねできる。繰り返すうちに英語の音になじみ，日本人が苦手とされるL（エル）と

R（アール）の聞き取りや発音もできるようになる可能性が高い」（幼児の英語教育）とあるように，日本語にはない発音を経験し，その違いを自然と受け入れることで自分のものにする。英語教育に対して多様化する経験の一部とする視点の変化は，子ども達の経験の幅を広げることとなる。

4）単なるイングリッシュスピーカーへのあこがれ

しかしその反面，幼児期の英語教育におけるデメリットの存在も考えなければならない。「立教大学大学院の鳥飼玖美子教授（言語コミュニケーション論）は『日本人には妙な“ネーティブ（現地の言葉）信仰”があって，ゆがんだ教育の基になっている。中高生の時期に勉強しなければ，英語はモノにならない。話せても中身がない日本人は，外国で評価されない』と言い切る。」（英語の早期教育効果は？）とあるように，日本人には英語に対する特別視があり，英語を話すことに至ってはある種のあこがれと言ってもいい心理が働いている。

日本における英語教育は長きにわたり，論争の対象となってきた。その裏には“中学校・高等学校と6年間にわたる英語教育の結果，しゃべることができるようにならなかった”ということが根強く残っているからである。このことからも，日本人の中にある英語に対する評価とは，“しゃべることができる”という点に集中しているかのようである。幼児期の子どもを抱える保護者の中には“自身が英語を全くしゃべることができないから，自分の子どもにはそのような思いをさせたくない”と考えている人も多いのではないだろうか。英語をしゃべることができることに対するあこがれが，現在の小学校における英語必修化の流れを助長し，幼児教育の世界における英語教育の流行に繋がっていると読むことができる。

5）国際人への第一歩に対する誤解

先ほど述べた“イングリッシュスピーカーへのあこがれ”は，国際化の流れによって人々の中で正当化された意見となっているようである。英語を世界共通語という捉え方により，英語＝国際人という図式も少なからず存在するであろう。

英語を話すことによって国際人としての扉が開かれるという流れは，幼児教育期にいる子ども達にどのような形で伝わっているかと考えると，上記したように英語教室の増加や保育所・幼稚園における英語活動の導入という形となって表れている。物事に対する柔軟な時期だからこそ，様々なことに対する吸収力の早い時期に英語に触れ，取り組むことで英語を話す“国際人”への第一歩という捉え方が強くなってきている。この英語＝国際人という図式に対して，国際化が進む社会が求めている人材となるべく要素を兼ねそなえているのだろうか。英語とはあくまでも世界に数多く存在する言語の一部であり，言語とは数多く文化を構成する要素の一部とする意味を子ども達には伝えきれていない。

6）英語学習教材により影響

英語を早い時期から子ども達の環境におくことは，幼児教育現場でのみ行われているのではない。むしろ，その傾向は一般家庭において顕著に見られ，その過熱ぶりは英語学習教材にも表れている。その教材の内容は様々であるが，子ども達に人気のあるキャラクターを使ったものもあり，DVDやCD，絵本が12セット入っているもので約50万円というものもある。これを実際に使用している母親の意見として，「幼いうちから始めた方がヒアリング力がつくと実感する。娘の可能性を開くことができれば」（英語の早期教育効果は？）と満足に語っている。しかし，早い時期からこのような英語学習教材を使った早期教育は子どもの英語習得や英語力向上に対して影響があるのだろうか。

アメリカ・ワシントン大学において次のような研究結果に対する考察が出された。「子ども向けのDVDやビデオを見ている子ども達は，それを見ていない子ども達よりも６～８語ほどの言葉を，見ていない子ども達よりも理解する。しかし，それは語彙力という点に関して言えば，ポジティブともネガティブとも言えるような効果はない」と言っている(Baby DVDs)。

慶応大学大学院社会学研究科の皆川泰代准教授（発達認知脳科学）の研究では，生後４カ月の子どもに対して行った実験によって，英語と日本語を聞き分ける力があるという結果が出たと述べている。ここで皆川准教授は「赤ちゃんの脳が，生後わずか４カ月で，母国語を聞くのに適した神経回路を形成している可能性がある。一方で，猿の泣き声にも敏感に反応する柔軟さを持っているのが興味深い」とも述べている。

以上のことからも，早い段階から英語を聞くということにおける何らかの影響はあるものの，それが直接英語能力に繋がっているとは言い難いのではないだろうか。ワシントン大学による発表においては，「幼い子どもにとって言葉を修得する最も良い方法は人から習うことのようである」と述べているように，直接的に語りかけられる言葉を日常的に耳にすることが重要ということがわかる。

子どもが朝起きるとすぐにDVDやビデオを流し見せることで，より英語を子どもの身近な言葉にする取り組みを行っている保護者もいるようである。しかし，ワシントン大学の研究者によるリサーチによると，アメリカにおける生後３カ月の子どもの約40%が日常的にテレビやDVDを見ていると報告している。その率は２歳の子どもになると約90%になるという。この研究の中で注目すべき点は1,000家族からの電話調査の結果，29%は見ているテレビやDVDが教育的かつ子どもにとってもいいものと信じており，23%は子どもにとって楽しくリラックスできると述べている。さらに，21%はテレビやDVDを見せることで，ベビーシッター代わりとなると言っていることである。

このことからも，いくら学術的に認められた内容であったとしても，子どもにとってテレビやDVDを見ているということには変わりない。子どもにとってのテレビやDVDの視聴に関する有害性は理解しているにもかかわらず，英語教育教材を視聴することは有害なものではないという認識をしているということになる。

Ⅳ．英語教育の低年齢化に関する一考察

客寄せ目玉商品になっていないか？

保育事業において，待機児童に関する問題は深刻なものとなっている。しかし，その一方では少子化が進み，子どもの数は減少の一途をたどっている。幼児教育現場においては少子化による入園児の減少を懸念しているところは少なくないであろう。上述したように，幼児教育現場において様々な取り組みを打ち出すことは，様々な機会を子ども達に与えることへと繋がり，子ども達は多種多様な経験をすることができる。

しかし，この様々な取り組みを単なる園児を確保するため，保護者に対するアピールポイントとして考えていないだろうか。体操教室・絵画教室・音楽教室・英語教室とたくさんの取り組みを行っていることで，保護者の目を引き付け入園児の獲得を考えているとするならば，これらの取り組みは子ども達にとってまったく意味をなさないものとなってしまう。ただ単に“子ども達にとっていい経験になる”，という考えでは幼児教育を行う側のねらいや意義が含まれず，持続していくことへの正当性が全くないことになる。このような取り組みでは，子ども達から自発的取り組みや自ら行う経験からの発展を望むことができない。英語教育を行う上でも，“なぜこ

の時期の子ども達に必要なのか”という設問に対して，理論性をもった答えが大切ではないだろうか。

日本における幼児期の英語の位置づけは？

英語を習得する上で，“早ければ早い方がいい”という意見がよく叫ばれている。文部科学省による小学校英語必修の流れにおいても，この考え方が根底にあることが後押しとなっていると考える。今の幼児教育現場における英語早教育には，小学校の英語必修化の流れと共に，“早ければ早い方がいい”という考え方から来る上での取り組みがなされている感がある。

北九州市にあるCIC英語幼児園では，３歳児クラスに米国人教師が絵を描いたカードを見せると，子ども達が即座に英語で答えるという活動を行い，子ども達に英語の語彙力をつけようとしている。園長である中山進さんは英語講師を長年務めた経験から，次のようなことを述べている。

> 英語は遅く始めても本物にならない。政治やビジネスで英語を使う人材を育てるなら，楽しく自然に覚えられる幼児期に始めるしかない。
>
> （幼児園英語たっぷり）

現在英語教育を行っている幼児教育現場において，このような考え方を持っている人は少なくないと考える。しかし，この上記の内容の中に一つの疑問点がある。それは“本物”という言葉である。“英語を遅く始めても本物にはならない”という一説における“本物”とは一体何なのだろうか。この点こそ，今の日本における英語教育に対して投げかけ，議論すべき点ではないだろうか。

英語を話す点において“本物”という捉え方をするのであれば，英語を第一言語・母国語とする国の人達には到底かなうはずもなく，また第２言語・外国語として英語に取り組み，習得した人たちは“偽物”ということになってしまう。はたして，この“本物”という考え方は子ども達が英語と関わる上で，必要なのだろうか。何をもってして“本物”と捉えるかは，英語を話すことができる，英語をネイティブスピーカーと思うほどの流暢で正しい発音を使いこなすという点にのみ着目するべきではないと考える。

流暢に英語を話すことよって得られることについて考えるならば，それは英語を話す機会におけるファーストインプレッションだけであろう。“どこで英語を学んだの？”，このような質問を受け，その質問に対して答える。おそらく英語を使ってコミュニケーションを取る上で，発音良く流暢に英語を話すことを話題にすることにおいては，このポイントだけであろう。

外国語としての英語と母語としての日本語

なぜ日本に生まれた子ども達は，日本語を使いコミュニケーションを取るのだろうか。日頃から日本語を使っていると，このような疑問を意識することなどなく，疑問に思うこともない。しかし，この疑問にこそ言語習得の重要性が含まれていると考える。

子どもが言語（言葉）を習得する上で，欠かすことができないものは愛着を持つことのできる大人の存在である。この愛着をもって接することのできる大人が，日頃より様々な言葉を投げかけてくることで，音声として捉えていた言葉をまさに“言語”として捉えていくのである。この子どもにとって愛着を持つことのできる大人は，子どもに投げかける言葉に対して知らず知らずのうちに，自らの持つ文化的背景を含ませているのである。もちろん，それぞれの言語自体が文化を構成する一要素という考えからも，子どもが言葉を習得する上では，必ずその言葉の持つ文化的要素に触れなければならないということが言える。

このように考えるならば，日本語を母語としている環境下において，英語とは外国語として捉える必要がある。ここで言う外国語とは，日本語の持つ文化的背景とは違うということへの気付きが必要だということである。この気付きがあるからこそ，日本語に対する理解がさらに深められ，そして外国語を話す目的が明確となる。言語＝文化という捉え方こそ，英語教育の低年齢化において必要な考え方ではないだろうか。

英語は教育の一部？文化の一部？

言語とは人間関係において自らの意思や状況を伝達し，情報を共有するために発展してきたと言える。そう考えるのであれば，言語とは思いや考えを伝える道具となる。しかし，言語とはただ単に伝達するための道具として発展したのではなく，それを使う人々の思想や取り巻く環境，さらには風土や生活習慣などの様々な要因が幾層にも積み重なっている。ここでも，やはり言語を文化の一部として捉えることができよう。

言葉とは単なる伝達ツールではないが，文化的要素を含むと考えるならば，それを駆使することで自らの思いを伝えるためには，より効率的に伝えるために理論的思考を身につける必要がある。自らの思いを整理し，しっかりとした理論を備えることで，文化的特徴を含む言語を有効に活用できるのではないだろうか。

このことは英語という言語に対するとらえ方においても，同じことが言えよう。英語という言語の持つ文化的背景を理解することこそ，真に英語を理解することになるのではないだろうか。英語の持つ美しさに気付く時，英語の発展における歴史に触れていることになる。

しかし，英語を教育の一部として捉えるならば，それは上述したように流暢に発音された英語にのみ反応することとなるだろう。流暢に発音された英語をハイスタンダードと位置付けることは，その内容や理論に対して，さらには英語の持つ本来の美しさに対しての気付きを失わせてしまう。

幼児教育期の子ども達における英語教育とは

幼児教育期の子どもは，物事に対するとらえ方が柔軟で，あらゆることに対する吸収力は目を見張るものがある。このことに注目するのであるならば，英語教育においても，まず自らの話す母語と比較することで違いを知るきっかけとなる。違いを知り，違いを楽しむ。新たな発見から子ども自身の持つ探究心や好奇心をさらに掻き立てる。幼児教育期の子ども達における英語教育とは，まさに違う文化を知るきっかけと考えることから始めるべきである。

“違い”に対して気付く力は，さらなる発展の力となるであろう。その力は時として違いを認める力となり，またある時には自らの持つ文化に対して再確認するきっかけとなる。幼児期の子ども達の持つ可能性を考えるならば，英語教育の持つ可能性の枠踏みを“話す”であったり，“流暢な発音”という枠組みを取り払う必要があるのではないだろうか。

Ⅴ．まとめ

国際化に対する“国際人”の意味

英語教育の目的とされる国際人の育成ということを考えるならば，国際人の真意を再確認する必要がある。何をもってして国際人なのか，日本における国際化とはどのような状態なのかを，理解しておかなければならない。先にも述べたように，単に英語を話すことができることが国際人としての基準ではない。「真の国際化とは，われわれのの日常の中から自然に立ち現れるはずのものです」（大津，p.102）とあるように，日常生活から感じ取る世界的潮流をいかにとらえ，グローバリズムに対する日本人たるアイデンティティーによって，日本という国・文化

を理解するかが大切である。英語を流暢に使い自らの考えを述べることや感じることは，英語を話すことのできない人たちに対して向けられた単なる“優越感”にすぎない。将来を担う子供たちにとって大切なことは，言語を言語としてのみ捉え，コミュニケーションツールとして使用することではないと考える。英語という言語も文化の一つと捉え，英語を使用する人々の生活や習慣，さらには伝統を感じ取り理解することこそ，今後の幼児教育において目指す“国際化”や“国際人”としなければならない。

幼児期における子どもの“最善の利益”を考える

“国際人”に対する定義を明確にする中で，子ども達の経験不足の現状が叫ばれて久しい今，経験という観点から英語教育の低年齢化について考えていくべきではないだろうか。技術進歩による様々な内容に対する疑似体験はあくまでも疑似体験にすぎない。３Dシステムやゲームのような世界とは，あたかも現実世界での様子のように映し出される。しかし，幼児期にいる子ども達にとって，実際の経験からくる感動には視覚・聴覚・嗅覚・触覚に対する付加価値的情報を子ども達にもたらす。幼児期における経験とは蓄積することだけにとどまらず，積み重ねた経験から新たな発想を生み出し，子どもたちの生きる力の基盤となる。そのためにも，英語教育の低年齢化に関しては経験という観点からとらえる必要がある。

幼児教育において，英語教育に対して早教育を主とする「早くに始めた方がいい」という安易な捉え方をするべきではない。英語に触れ，英語を通して新たな文化に触れるという経験と捉えることが必要である。経験をすることで自らの発達を促し，成長した姿からさらなる経験を積んでいく。この流れを軸とすることで，子ども達は経験を喜びとし，自発的・積極的活動に取り組むことができる。英語教育においても様々な幼児期経験の一部という視点からとらえ，子ども達に提示することが必要ではないだろうか。受動的な英語教育では，単なる詰め込み教育となってしまう。自発的・積極的な活動を主流として考えるならば，幼児期における英語教育は現在存在するあらゆる言語の一つとして提供されるべきである。未経験からくる不安や恐怖感を経験し，その対処法を自らの力で切り開く経験こそが経験不足の中にある子どもの自発的・積極的行動へとつながると考える。

自発的・積極的行動によって啓発された経験は，子ども達の根幹に位置づけられ，さらなる自発的・積極的行動に対する基盤となる。

英語教育が幼児期の子ども達が成長する過程の中で存在しうるためには，まず子どもにとっての“最善の利益”が優先される必要がある。今の子ども達に必要なことは何かという観点からその内容を考え，提示することが大切である。そのためにも，英語という言語の本質を捉え，文化の一部という視点に立つことで日本語と英語の違いに着目できるのではないだろうか。違いを知り，違いを認めることが国際化を目指す日本社会において大切な一歩のはずである。

参考・引用文献

1）大津由紀雄　編「日本の英語教育に必要なこと―小学校英語と英語教育政策」慶応義塾大学出版会株式会社，2006年７月10

2）日服部孝彦，吉澤寿一　著「英語を使った『総合的な学習の時間』―小学校の授業実践」大修館書店，2002年４月１日

3）「切り抜き速報　保育と幼児教育版　2008年６月」“英語柔軟なうちに”株式会社ニホン・ミック

4）「切り抜き速報　保育と幼児教育版　2008年10月」“英語と日本語で絵本朗読”株式会社ニホン・ミック

5）「切り抜き速報　保育と幼児教育版　2009年３月」“幼稚園で英語「必修」のナゾ”株式会社ニホン･ミック

6）「切り抜き速報　保育と幼児教育版　2009年９月」“幼児の英語教育”株式会社ニホン・ミック

7）「切り抜き速報　保育と幼児教育版　2010年６月」“園児も親しむABC―英語活動が盛ん”株式会社ニホン・ミック

8）「切り抜き速報　保育と幼児教育版　2010年６月」“英語の早期教育効果は？”株式会社ニホン・ミック

9）「切り抜き速報　保育と幼児教育版　2010年９月」“生後４カ月，母国語聞き分け―脳の反応，日・英語で違い”株式会社ニホン・ミック

10）「切り抜き速報　保育と幼児教育版　2010年９月」“幼児園　英語たっぷり―北九州２～６歳，楽しく学ぶ”株式会社ニホン・ミック

11）「切り抜き速報　保育と幼児教育版　2010年11月」“英語保育　関心高まる―小学校での必修化見据え”株式会社ニホン・ミック

12）「Baby DVEs, videos may hinder, not help, infants’ language development 」University of Washington News. August 7, 2007 http://uwnews.washington.edu/ni/article.asp?articleID=35898

13）「40 percent of 3-month-old infants are regularly watching TV, DVDs or videos」University of Washington News. May 7, 2007 http://uwnews.org/article.asp?articleID=32790